

koide mayo

小出麻代

ある日、「Oregon Nikkei Regacy Center 」という場所に辿りついた。

そこでそう遠くはない昔、私と同じ場所からやってきた人々がこの地で暮らしていたことを知った。

彼らは Japanese American と呼ばれ、自分達の街をつくった。

いかなる環境下に置かれている間も、彼らは明日の暮らしの為に手を動かし続けた。

彼らが暮らした地面の上を歩いてみる。

日々の暮らしを想像してみる。

この場所で見た景色、心の中で思い描いた故郷の風景は、私がいま見ている、思い出しているものと

同じだったのだろうか。

異なる世界や他者に触れることで、自分の輪郭がはっきり見えたり、あるいは溶け出すような体験

を繰り返したのだろうか。私と同じように。

手を動かし続けることは、祈ることと似ている。

彼らが小さな小さな鳥にこめた静かな祈りを、どこまで知ることができるだろう。

小出麻代

C.V

小出麻代 Koide Mayo

https://www.mayokoide.net

1983年、大阪府生まれ

2009年、京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程版画分野修了

おもな展覧会

2018 「生業・ふるまい・チューニング 小出麻代ー越野潤」(京都芸術センター)

2017 〔個展〕 うまれくるもの (A-lab / 兵庫)
- empty park (Gallery PARC)

2016 連鎖とまたたき (京都精華大学ギャラリーフロール)

- PAT in kyoto 京都国際版画トリエンナーレ2016 (京都市美術館)

2015 まちの中の時間 (A-lab / 兵庫)

- 大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2015 枯木又プロジェクト (旧枯木又分校)

- still moving「SUUJIN MAINTENANCE CLUB」(元崇仁小学校 / 京都)

2014 〔個展〕 空のうえ 水のした 七色のはじまり (the three konohana / 大阪)

- 「架設」第一期 (京都精華大学T-101)

2013 〔個展〕 すいこみ はきだし ひろがる (LABORATORY / 京都)

2012 1floor2012「 TTYTT,-to tell you the truth,-」金井悠、小出麻代 (神戸アートヴィレッジセンター)

2011 「鏡の反対側」(Division / 京都)

2010 〔個展〕 nu show (AD&A gallery / 大阪)

2009 〔個展〕 Lights, Camera, Action (AD&A gallery / 大阪)

- 〔個展〕 mockmentary garden (番画廊 / 大阪)

- Re:print (室町アートコートギャラリー)

2008 大学版画展 (町田市立国際版画美術館)

2006 ART CAMP 2006 (ギャラリーヤマグチ クンストパウ / 大阪) *2007年も

ワークショップ

2016 アートスタディプログラムびはくルーム「誰かの為のシルクスクリーン」(芦屋市立美術博物館)

2014 醤の郷+坂手港プロジェクト - 観光から関係へRelational Tourism - 馬木の寺子屋「印刷の時間」(UMAKI CAMP / 小豆島・香川)

レジデンス

2018 END OF SUMMER (Yale Union / Portland,US)

2013 artFUNKL residency [Aspirus 04] (artFUNKL / Manchester / UK)

text (Gallery PARC)

小出麻代は「自分がどう生きていくか、どう生きていけるか」を考え続ける中で、「豊かさとは何か」という問いを持ち、様々な場所・土地を訪れ、多くの人々と出会うことに積極的に取り組んでいます。そのひとつの機会として2018年の夏の1ヶ月、ポートランド(アメリカ)でのレジデンスに参加した小出は、短い滞在の中でポートランドの歴史や風土、人々の暮らしの中に様々な発見を積み重ねます。

ポートランドには古くから多くの日本人が移住し、日本人町 (Japanese Town) が建設されていたこと^{〔註1〕}。第二次世界大戦時に多くの日系人がトランクひとつで収容所に集められ、そこでの暮らしを余儀なくされたこと。収容所で支給された木材を使って、机や椅子、ベッドやタンスなどの「生活に必要な実用品」をつくった彼らが、玩具や遊具、彫刻や絵画などをもつくっていたこと、それらは総じて「CAMP ART」と呼ばれていることなどを知った小出は、とりわけ「小さな鳥のピン」^{〔註1〕}が気に留まりました。そのピンは、見たことのないカタチの鳥もあれば、鶴のカタチをしたピンもあるなど、どれも小さいけれど丁寧な彫刻と彩色が施されていたそうです。

小出は本展に寄せた手紙^{〔註2〕}の中で『手を動かし続けることは、祈ることと似ている』と言っています。手を動かすことで明日を明日に繋ぐこと。そうして、より良い明日を思い・願い・祈ること。また、その明日を自ら「つくる」ために、やはり手を動かすこと。そうして懸命に生きるなかで小さな祈りを込めた彼らと同様に、本展において小出は、手を動かすことで自身の「生きること」を模索します。

小出はシルクスクリーンや写真プリント、型抜き成型したシリコンによるオブジェクトなどとともに、ガラス・鏡・電球・糸・紙・落ち葉・枝・針金など、私たちが日常に目と手に触れる素材を空間に配したインスタレーションを手がけます。小出の「つくったもの」や「みつけたもの」は、自身の記憶や体験、あるいは展示空間での発見を取り入れながら会場内に(点)として配されます。ここで鑑賞者は、素材・形態・位置・距離・在り方などに自身の発見や想像によって関係性(線)を見出すこと、あるいは記憶を依り代とした情景(面)を見ることなど、それぞれの時間を過ごすことができます。

小出は、それらが見出され、呼び出されるために必要と思われる「間」に注意を払いながら、空間内に「もの」を丁寧に配置します。また、近年では光(と影)、あるいは鏡(と虚像)などによって生じる関係を用いることで、ものと鑑賞者と空間のそれぞれが出会い(すれ違う)「瞬間」を内包させることにも意識を向けているように思えます。また空間や素材への意識は、それぞれが含み持つ時間(歴史)への眼差しとして、近年では土地やものを始点としたリサーチにも積極的に取り組んでいます。

本展において小出は、2階の展示空間に「鏡、1年ほど前に拾った枯れ葉、枝、シリコンによる独楽」といった要素を配置し、それらを光によって関係させています。3階ではポートランドで制作した、活版印刷により9つの言葉を9葉の紙に印刷し、それぞれに色を関わらせた作品を展示。4階には、2階と同じく鏡と光を用いた作品が拡がりますが、ここでは自然光と関わることで、朝・昼・夕・夜や天気、鑑賞者の位置によって、それぞれの要素に見いだす関係性が刻々と変化する様を見ることができます。

小出は展示空間にゆっくりと留まるなかで時間や空間において「見えるもの / 見えないもの」を見据えながら、「もの ともの」や「もの とひと」の間に生じる関係を思い、手を動かしてきました。それは「見えるもの」だけをすべてとするのではなく、「見えないもの」を眼差し、想像することや、「見ようとする」自らの動きが目の前の風景をより豊かなものとするに気づかせてくれるようです。

本展において、鑑賞者の皆様にもそれぞれの「豊かさ」を見つけ、つくり出していただければ幸いです。

〔註1〕 2階カウンター上の資料『Nihonmachi』、『The Art of Gaman』はご自由に参照ください。

〔註2〕 2階カウンターにて、本展の背景がより理解できる手紙やポートランドでの写真、シルクスクリーンプリントなどを封入した作品《地へ還る | 地から足を離す》(ed.100 ￥1,200円)を販売しております。